

関東大震災100周年

「朝鮮人虐殺」から学ぶこと

講演要旨

加藤直樹 先生

(ノンフィクション作家)

2023年10月29日 東京 東医健保会館

見えない社会の存在

こんにちは。加藤といいます。講演をする機会はたまにありますが、多くの場合日本の市民運動、大学です。そういった場合には、100年前にこういうことがありましたという話をしていのですが、今集まっている皆さんは被害者の曾孫ぐらゐに当たるわけです。もちろん、実際に曾おじいさん、曾おばあさんが被害者だったということではなくても、私は日本人として100年前の加害者の曾孫に当たる。そういった中で話すのは、どのように何を語るのかを自分の中で突き付けられることでもあります。

私がなぜ朝鮮人虐殺という事実に関心を持ったのかという個人的な話をして、それから当時起きたことを解説し、なぜ起きたのかという話をし、そして現代の話につなげたいと思います。それが、結局はどのような視点で、どのような関心から、この100年前の出来事を私がずっと調べているかという説明にもなるかと思えます。

私は1967年、東京新宿区の

大久保に生まれ育ちました。大久保というのは、今は韓流タウンという感じになっていますが、私が子どものころは地味な街、普通の商店街でした。他の地域と違うのは、さまざまな階層の人たちがいた。大久保通りという通りがあつて、その南側は歌舞伎町で働いている人たちが多く、北のほうは国鉄アパートがあつて国鉄の労働者の子どもたちが友達には多かった。ロッテの工場もありまして、近所のお母さん方のパート先だったのです。

大阪の鶴橋ほどではないですが、クラスに大体1人か2人は金君とか李君、高さんといったような君が在日であることはもちろん分かっていましたが、在日とはどういうことなのかは全く分かっていなかったです。日本名で通っている子たちが大勢いて、僕の友達の中にもいたかもしれないことは、その頃は全く想像も付いていなかったです。そのことに気付き始めたのは、20代になつてからでした。

覚えているのは、年末に在日のおじいさん方の飲み会に参加という

か、紛れ込むことがあつて、一緒に飲んでいると芸能人の話になって、「あいつも在日だ」、「あの芸能人も在日だ」と話し出したのです。もう全員が、人気のある芸能人はみんなそうなのだとわんぱかりの話をしていたのを覚えています。

その後、酔っぱらううちに帰りテレビをつけたら、隠し芸大会で、おじいさんたちが「彼は在日だ」と言っていた人が司会をやつていて、沖繩出身の歌手も出演している。全員が和服、紋付き袴だったり着物だったりを着ていて、福笑いをするのです。それを見た時に強烈な印象を受けまして、ああ、自分は分かっていなかった。つまり、どこか、この社会というのは基本的に日本人が住んでいて、たまに日本人ではない人がいる、そんな発想で自分はいた。そうではなくて、この社会は、日本人が数としては多いわけですが、在日韓国・朝鮮人も含めて、様々な民族の人たちが一緒に住んでいる。だから違いがあるのだ。それが事実として前提であつて、様々な人が一緒に住んでいる。それが自分は見えていなかった。それが

見えない社会がれつきとしてあつて、自分もそれを見てこなかった。マジョリテイーのアイデンティティーがスタンダードだなんてことは言えない。いろんな人々がつくつていく。にもかかわらずそれを見えない。にもかかわらずそれを見えない。だということに、その時強烈に気が付いたのです。その発見というのは、衝撃でした。

そこから複数のアイデンティティー、複数の民族の人々がつくつていく社会というものを、事実として知っていきたいというような思いが出てくるようになっていきました。それは90年代半ばぐらいだと思います。

都知事の発言

次のきつかけが、2000年の石原慎太郎都知事の「三国人発言」でした。当時、すごく問題になったのです。石原慎太郎が都知事だった2000年の4月、自衛隊の観閲式で彼は自衛隊員たちを前に「東京には違法に入国した外国人がたくさんいる。大きな災害が起きれば必ず彼らは暴動を起すのだらう。」

う。であるから、自衛隊にはその時に治安出動をしてほしい」と言ったのです。その頃、私は失業中で、宅急便のアルバイトをしていました。朝作業をしていると、ラジオからそれが流れてきたのです。

石原慎太郎が、「地震が起きたら外国人が暴動を起す」と言い、外国人を指す時に「三国人」という差別的な表現を使ったことで「三国人発言」と呼ばれているわけですが、この時、とんかちで頭を殴られるような衝撃を受けました。それは三国人という差別表現を使ったことではなく、もちろんそれはそれで問題ですが、「地震が起きたら外国人が暴動を起す、だから自衛隊で鎮圧しなくてはいけない」。これは関東大震災の時に広がった流言と全く同じじゃないのか。それを東京都知事が言っている。これは大変なことではないか。初めてその時衝撃を受けたのです。

実はそれまで、私は関東大震災の朝鮮人虐殺のことは、教科書に書いてある程度、あるいは本でちらつと出てくる程度の知識しかなかった。それでも、これは大変なことを

言っていると思いました。歴史についての認識がおかしいとかではなくて、そんな人が都知事にいる。次に地震が起きた時に同じことが起きるのではないかと直感したので。そこから、初めて朝鮮人虐殺についての勉強をし始めました。勉強し始めて非常に驚いたのは、それまで自分が思っていたよりもはるかに虐殺の規模は大きかったし、また起きたことの意味もとても深刻だったという事です。さらにもう1つ、最初の直感、つまりこういうことを都知事が言っているというのとは大変なことなのではないかという直感がその中で確かめられていったのです。これは過去のことじゃない、こういうことを放置しておくとこれから何が起るかわからないと。

慰霊堂で気付いた東京の歴史

横網町公園の真ん中には慰霊堂がありまして、そこで毎年9月1日に関東大震災の犠牲者の法要をやっています。ある年、慰霊堂に行ってみました。中に入ってみるとおじいさんおばさんでいっぱいです。隣に座っていたおばあさんに「こ

う法要に来られているということはお家族が亡くなったんだと思えますけども、どなたが亡くなったんですか」と聞いたのです。おばあさんは、「いいえ、震災じゃなくて空襲です」と。その時、初めて知りました。毎年9月1日に東京都が行っている法要で供養しているのは、関東大震災の死者だけではなく、同時に東京大空襲の死者だったのです。

妙なことだなと思いつながら待っていたのですが、あずまやのほうから朝鮮舞踊の音が聞こえてきたのです。そこにいた東京都の職員に「すみません、あれは何の音ですか」と聞きました。すると職員が、「ああ、あれは午後に行われる朝鮮人虐殺犠牲者の追悼式典のリハーサルの音です」と言いました。その時に初めて、横網町公園で虐殺犠牲者の追悼式典をやっていることを知りました。それで、これまたその瞬間に突然気付いたことがあったのです。今僕の隣に座っているおばあさんは、空襲でお兄さんを亡くしている。その1945年に、お兄さんが幾つで亡くなったかは知りませんが

が、おばあさんの年齢から考えると、10代だったかもしれない。しかし、その親、つまり、おばあさんからするとお父さんなりお母さんなりがいる。その人たちは、恐らく1945年には30代くらいだと思いのです。そして関東大震災は、1945年の約20年前のことです。その時にこのおばあさんのお父さんはこの近くに住んでいたかもしれない。関東大震災の時に、彼女のお父さんは何をしていたらどうかと考えたのです。そして表から聞こえてくる朝鮮舞踊の向こうに、あの時に殺されたかかった人の子孫がいるかもしれないと思いました。その時、初めて気付いたのです。東京には、あの時殺した人たちの子孫と、あの時殺された人、殺されかかった人の子孫が、一緒に行き交っている、東京はそういう街なのだ。そして、それはないことにされている。

あるわけではない。ところが、とてもない事件が起きたのに、それがなかったことにされて、そこにかつての被害者と加害者の子孫が生きている。そういうことがばつと見えてしまったのです。その瞬間、これは自分が何かを書かなければいけないと思いました。こうしてずっと後に書いたのが「九月、東京の路上で」という本です。

回地震発生と流言

関東大震災が起きたのがちょうど100年前です。1923年9月1日、地震発生時刻が11時58分。お昼の手前、このことが非常に大きな被害を招きました。お昼時で、家でもお昼ご飯を作っていますし、繁華街のレストラン、食堂で火を使っていた。そこに地震が起きたのです。延焼が始まった起点だけではなく、数十カ所でも火災が起きたのです。さらに、タイミングが悪かったのは、当時台風に近いぐらいの低気圧が来ていて、強風が吹き荒れていた。この強風が、頻りに風向きを変えた。その結果、どんどん都市火災が広がっていったのです。当時

は東京市という市なのですが、今の23区の3分の2ぐらいの大きさです。例えば渋谷はまだ東京市ではなかった。その東京市のうち、44%が火災で消失するという状況になりました。横浜は80%が消失。大変な都市火災です。各地で、逃げる先逃げる先で火が回る。人々は、広い場所を求めて逃げていきま。日比谷公園、皇居の前、そして荒川河川敷。実は荒川は人工の川で当時工事中でした。だから更地があった。この工事中の更地に十数万人が集まったと当時の警察署の報告にあります。立錐の余地もない状況になる。人々が9月1日の夕方からどんどん、群集化した形で集まってくる。こういう中で流言が生まれてきたのです。

回暴力の始まりと拡大

9月1日の一番早い時点で確認されている限りでは、午後7時に横浜で朝鮮人に対する暴力が始まっています。当時の朝鮮人は日本に来て1、2年ぐらいの肉体労働者が多く、日本語もあまりできない人が多かった。そういう人を見つけると、「あつ、こいつら朝鮮人だ」と言っている人々が見られる。人々が武装する。竹槍や日本刀を持って、襲いかかる。そういった事態が、同日の夜には横浜、あるいは荒川、品川でも起きている。当時のことを伝えるさまざまな証言があるので、荒川河川敷ですと横昌範さんという人が当時のことを証言しています。

シンさんはこういう経験をします。荒川河川敷で一緒にいたのは20人ぐらい。自警団が来る方向に一番近かったのはイム・ソニルという荒川の堤防工事で働いていた人です。日本語をほとんど聞き取ることができません。自警団が彼のそばまで来て何か言うと、彼は私の名を大声で呼び、「何か言っている

がさつぱり分からんから通訳してくれ」と声を張り上げました。その言葉が終わるやいなや自警団の手から日本刀が振り下ろされ、彼は虐殺されました。次に座っていた男も殺されました。私は、横にいる弟ドンフンと義兄(姉の夫)に合図し、鉄橋から無我夢中で飛び降りました。その後、シンさんは結局自警団に捕まって、体中を刺されて気絶してしまいました。目が覚めると警察署の庭に死体と一緒に山積みされていて、それを弟さんが見つけ出し何とか命を取り留めた。このドンフンさんの孫が今、法政大学で虐殺の研究をしている歴史学者の横蒼宇さんという方です。

9月1日の夜から日本刀を持った人々が朝鮮人を追いかけるという事態が起きたことを色々な人が、たとえば作家の佐藤春夫が書いています。別の所で講演した時には、おじいさんが上野で自警団に追われて危ない思いをしたという人に会いました。

要な点です。なぜ拡大したか。流言を警察が広めたのです。ここが非常に重要な点です。各地で「朝鮮人の集団が5キロ先まで迫っています。男はみんな武装してくださ」というようなことを警官が言っている。そういう状況の中で、警察が言うわけですから人々はそれを信じてどんどん武装する。朝鮮人だと思っただ人を見つければ、捕まえて警察に連れて行ったり暴力を振るったりする。殺してしまうこともある。

回戒厳令、軍隊、自警団

流言、虐殺の拡散に後押しをしたのは、警察だけではありませんでした。もう一つは戒厳令です。地震が起きて人々が上野公園とか日

比谷公園に集まってくるさまを見て、当時の日本政府の中枢、内務大臣、内務省の幹部は、これが米騒動のような都市騒動に繋がるのではないかと恐れ、天皇が危ういと考えた。そこで、吟味もせずに9月2日夕方には戒厳令を敷いたのだ。

ところが、戒厳令というのは何らかの敵がいないと成立しない。戒厳令には2つの敵が想定されています。1つは、外国の軍隊が来ている、外敵が近くまで迫ってきている場合です。もう1つは内乱です。戒厳令に従って軍隊が東京に進駐してきたわけですが、軍隊はこの戒厳令の敵は誰なのかを分らないまま来ている。そこに住民たちを通じて、朝鮮人が暴動を起こしているという話を聞くわけです。ああ、敵は朝鮮人なのかということで、軍隊自らが各地で朝鮮人を拘束し捕らえ殺すという事態が展開します。戒厳令と軍隊の行動が、人々をますます、やつぱり朝鮮人が暴動を起こしている、これと戦わなくてはいけない、そういった発想に広げていくのです。どんどん悪循環に

つてくれとかいうようなことを避難民が言うわけです。しかし、こういって事態を引き起こした最大の要因は、内務省の打電です。
回遅すぎた沈静化
しかし行政機関も軍隊も、9月3日ぐらいからこれはどうもおかしいということに気付き始めるのです。朝鮮人暴動なんてものはいくら探しても見当たらない。井戸を調べても毒はない。爆弾だと思っただけで、3日あたりから行政は徐々に転換していくのです。

ただしすぐさま、我々が宣伝したものは全部デマでしたとは言わなかった。まず朝鮮人は全部捕まえて調べ、容疑があるものは犯人として扱う。それ以外のもは保護するという、非常に中途半端な対応でした。半分はまだ朝鮮人による強盗なり犯罪なりがあったかもしれないかと思っているわけです。容疑者扱いで、保護するといつても両腕をつかんで警察署に連行していくさまを見るわけですから、街の人々は、やつぱり朝鮮人は悪いことをや



なっていくきました。虐殺のありようは地域、あるいはその日によってだいぶ違います。1つは先ほどの慎昌範さんの話のように、人々が避難して集まっている所で起きる虐殺です。当時14歳だった清川虹子さんという有名な女優さんが後に自伝で、上野公園で縛り付けられた朝鮮人が男たちによって殺されるのを見たと言っています。
もう1つが自警団、群衆ではなくメンバーシップを持った自警団です。在郷人会や青年団が、地域で青年たちを集めて竹槍や日本刀で武装し検問を敷くわけです。当時世田谷の烏山村の青年団が甲州街道に検問を敷き、都心に向かっ

つていると考える。
だから全然事態は鎮静化しないのです。ようやくこれが鎮静化するのは、9月5日に山本権兵衛首相が迫害をやめろという声明を出してからです。その翌日には戒厳司令部が朝鮮人に対する迫害をやめろ、慎め、という声明を出して、これをピラにして東京で10万枚もいた。これによって、翌日には流言を取り締まる治安維持令という勅令が出されて、ようやく虐殺が収束していったのです。

回差別の論理の存在
朝鮮人虐殺とは、こうした1週間の出来事でした。では、なぜこういうことが起きたのか。それを考えなくてはならない。私の考えでは、3つの論理があったのではないかと整理しています。

1つは差別の論理、もう1つは治安の論理、3つ目が軍事の論理。まず差別の論理です。「朝鮮人が放火をしているに違いない」という流言が広がった話をしました。流言がどうして発生するかもお話ししたいと思います。人々は説明を求めたわ

て西から東へと新宿方向に向かって走ってくるトラックを見つめます。被災地に向かってトラックが行くのは怪しいということで、後ろの幌を開けるとそこに17人の朝鮮人労働者が乗っていたのです。「ああ、朝鮮人だ」と言って、その17人に襲いかかり、次々と竹槍などで刺して重傷を負わせていった。このうちホン・ギベク(洪其白)さんという方が亡くなりました。その場を逃走した2人も結局調布で殺されています。ところが、最近郷土史家の研究で分かっています。これが地域の自警団が検問を敷いて起こす事件の典型例だと思えます。

もう1つ、被災地ですらない埼玉や千葉、群馬でも虐殺事件が起きています。ここにも行政が関わっているのです。先ほど警察と戒厳令と軍隊について話をしましたが、もう一つ拡散した機関として出てくるのが内務省警保局です。今でいう警察庁に当たる治安のトップですが、その警保局の局長名で全国に通達が出るのです。内容は、これはさっきの正力のものよりさらに踏み込んで、はつきりと「不逞朝

けです。なぜこんなに火災が広がるのか。放火に違いない。これは間違った推論だけれども、人はそういうふうにも考えることもあるだろうと思えます。でも、この先が重要なのです。では誰が放火したのかという時に、当時の人々は「朝鮮人に違いない」と思ったわけです。なぜ朝鮮人なのか。別にアメリカ人でもいいわけです。もっと他の誰かでもいい。なぜ朝鮮人なのかです。

ここにも流言についての社会学的な研究テーマがあります。流言というのは、なかなか難しいもので、噂も流しさえすれば広がるものではないのです。変な例えですが、「Twitter」などで、誰かのツイートがたまにワットと広がることあります。しかし、このツイートは広がったけれど、これは広がらない、ということがありますよ。それは、人々が共感したものが広がったり見があったりすると広がるわけです。流言も同じで、ある流言は広がる、ある流言は広がらない。

こういつた現象について、アメリカの社会心理学者、タモツ・シプタ二という人が研究しています。シブ

鮮人」が各地で放火をし、爆弾を投げている。各地の朝鮮人を取り締められる内容です。これが全国の県知事に送られるのです。埼玉、千葉、群馬では、この通達を受けて県が上から自警団を結成します。新聞も、その頃はひどい流言記事をばんばん出して、全国各地で朝鮮人暴動が起きているというふうな流言記事ですね。人々はそれを読んで、また避難してきた人々の口から流言を聞いている。例えば上野の山で日本人と朝鮮人の戦争になっているとか、かたきを取

タ二によれば、それは人々がその事態、この場合は災害ですが、その事態の前に何に信憑性があると考えていたかに関わっているというのです。砕けた言い方をすれば、何が本当らしく聞かえるかということです。この場合でいうと、誰が放火したのかという時に、あいつらならやりかねないと思っていた人々が放火の犯人にされるわけです。アメリカ人が放火したと言っても多分、そんなばかなことあるわけないだろう、という話になる。

実は「あいつらが犯人だ」と言われた集団は他にもいました。それは社会主義者です。社会主義者は朝鮮人が放火をしたという流言だつた。ところが流言がどんどん広がっていき、社会主義者が消えてしまいくので、社会主義者が放火したという流言は、信憑性を持たなかった。当時、社会主義者は「アカ」と言われて人々に嫌われ恐れられていました。それでも当時の人々は、「いや、いくら社会主義者でも放火はしないでしょう」と思った。ところが朝鮮人となつたら、「あいつらならやりかねな



い」と思った。では、なぜ当時の人々はそう考えたのか。

流言の前に人々が何を信じていたかに関わっているという話をしました。つまり、1923年9月1日よりさかのぼって見ないといけない。さかのぼると何ががあるか。直近でいうとその4年前、1919年に、三・一独立運動がありました。皆さんもご存じのとおり「大韓独立万歳」を叫んで朝鮮半島全土で人々がデモをした運動でした。ところがこの三・一独立運動を、当時日本がメディアはほとんどまともに正面から向き合って報道しなかったのです。デモが始まった時には、日本のメディアは非常に嘲笑していたのです。こいつら独立とか何とか言っているけれども、独立の意味も分からないで騒いでるだけだろう、すぐ収まるだろうと、こういつた報道をしていました。ところがデモがどんどん続く。そうなるにつれて、今度はその後ろに外国の宣教師がいるのではないか、あるいは独立宣言を書いた天道教の教祖、指導者が、どれだけ陰謀家で悪いやつかと歪曲して報道する。それでもデモがや

まない。そのうちに憲兵隊がデモを解散させるべくデモ隊に発砲して、人々がどんどん撃たれて死んでいったわけですが、こういつたことを日本のメディアは冷ややかに報じているのです。つまり、どんなに説得してもデモが解散しなかったので憲兵隊が発砲した。その結果、死者十数名というような報道をするのです。

ところが、それでもデモは収まらない。群衆が増え続けていく中で、朝鮮の人々の群衆のほうに投石などで憲兵隊に反撃する場合も出てくるわけです。石が飛んでくれば、銃を持った憲兵隊でも場合によっては逃げ去る。ところが、敗走する中で巡査なり憲兵が蹴つづいて転ぶ。そこに群衆が追いかけてきて、その巡査を殴り殺してしまうということも起きる。三・一独立運動の中で朝鮮人は数千人も殺されていますが、日本人の憲兵隊、警察官の中でも100人ぐらいは負傷していて、10人ほどの死者が出ているのです。日本人側に死者が出ると、日本のメディアはがぜん大変な報道をするわけです。巡査はとんでもない残酷な殺され方をし

た。もはやこれはデモでも何でもない、日本人と見れば何でも全員殺してしまえというような、憎しみにかられた群衆である、というような報道をするのです。朝鮮人というのは恐ろしい連中であるという報道が始まっていく。

回 「不逞鮮人」報道の実態

そこから関東大震災までの4年間、「不逞鮮人」という言葉が使われます。これはこの頃定着した言葉です。不逞鮮人報道について研究した論文があるぐらいです。不逞鮮人が陰謀を働いている、不逞鮮人が何か暴動を準備している、そういう報道が日本のメディアにあふれ返ってきた。例えば早稲田大学で、独立の思いを持って勉強会を開いていた留學生が逮捕される。そうすると、こいつは爆弾を準備していたと報道され、尾ひれを付けて書くわけです。

あるいは、これは兵庫県伊丹の水道施設で起きた出来事の記事ですが、山中にある上水道施設で夜中にカンカンと施設を叩く音が聞こえる。何だろうと思った職員が見に

行くと、朝鮮人風の男が無言で鉄の棒のようなもので施設を破壊しようとしていた。それをとがめたら朝鮮人風の男は闇の中に逃げていった。無言の男がどうして「朝鮮人風」と言えるのでしょうか。怪しい者は全部朝鮮人だというような報道がなされていたのです。

その結果、人々は9月1日、火災が広がる中で朝鮮人が放火したと考えるに至ったわけです。このことについては、中西伊之助という作家が震災の2カ月後ぐらいに日本のメディアを批判する記事を「婦人公論」で書いています。メディアがそういう幻想を育てた。爆弾だ、テロだ、そういう報道をしてきた結果が人々の中に狂う原因を育てていた。それがこの虐殺に繋がったのではないかと。こうして育てられてきた朝鮮人に対する恐怖、彼らが日本人に対して何か恐ろしいことをしてくるのではないかとという恐怖が、流言に信憑性を与えたわけです。

ただ、差別の論理という言葉で言おうとすることの、これは半分に過ぎません。もう半分のことがあ

ります。仮に、百歩譲って朝鮮人が放火をしたと人々が信じたとしても、なぜ殺せるかです。

実は、放火事件はなかったわけではないのです。もちろん9月1日2日の火災が広がっている時に放火する人はいません。火災が落ち着いた後に、面白がって火を付けたりする人はいいたのです。例えば新聞記事に残っているのは、大人たちが自警団でわあわあやっているのからかかってやろうと思つて、自宅の物置に16歳の少女が火を付けたという記事があります。あるいは、ある家の使用人が、嫌いな雇い主に嫌がらせのつもりで納屋に火を付け、そして、朝鮮人が火を付けたのを見たと言つて騒いで回るのですが、結局その使用人が火を付けたことがばれるのです。

この16歳の少女が火を付けたのだから、女の子という女の子はみんな殺してしまえという話にはならなかった。使用人が火を付けたのだから、使用人はみんな殺してしまえという話にならなかったわけですから、朝鮮人の場合は、朝鮮人が火を付けたに違いとなれば、

全ての朝鮮人を殺してしまえるわけです。なぜ殺せるのか。ここにもやはり、韓国併合以来、つくられた朝鮮人観がある。要するに朝鮮人というのは日本人より劣った存在だと、殺してもいいのだと、そういう差別がそこに介在しないと殺せないわけです。つまり、人々の意識の中で朝鮮人は一方で恐ろしい日本人をわけもなく殺しに来る怪物であり、一方で殺してもいい、そういう劣った存在である。そういう差別が日本人の中にあつた。それが流言と虐殺を生んだ。これが、「差別の論理」という言葉で私が言いたかったことです。

回 治安の論理とは何か

もう1つが、治安の論理です。警察が流言を広げたという話をしました。なぜ警察がそんなことをしたのか。いくつか説明の仕方があるのですが、1つにはエリートパニックという言葉があります。大きな災害が起きた時に、警察、治安官僚が流言を拡散することは、実は関東大震災の時だけではなく、世界の歴史の中に何回も似たよう

なことがありました。

例えば2005年に「カトリック」というハリケーンがアメリカのニューオーリンズを襲った時に、黒人が略奪をしている、犯罪を繰り返している、被災地はとんでもないことになっている、という流言が生まれるのですが、この流言を広げたのはニューオーリンズの市長であり、信じたのは警察だったのです。

これを、アメリカの思想家レベック・ソルニツトという人は、エリートパニックという言葉で呼んでいます。災害が起きた時に人々の安全、命を心配するよりも、自分たちのコントロールが効かなくなることを、ほうを恐れるのです。その恐怖から、マイノリティーが悪さをしているに違いないという発想にすぐ飛びつく。彼らは普通の人より流言を信じやすいと書いています。

まさにそれをうかがわせるようなことを、当時の日本の治安官僚たちが言っているのです。警察が流言を広げたのではないかと、この問題は、関東大震災後の11月に国会で問題になりました。警察がその朝鮮人流言を広げた結果じゃないの

か、警察の責任はどうなるんだという質問に対して、内務大臣の後藤新平が「流言飛語そのものは少しも害にならなかつたものを伝播したのではなくして、この注意は当時にあつて甚だ必要なるものでありし」ということも疑いなきことであります」と答弁しています。言葉をひねっているのが分かります。言葉はひねりますが、似たようなことを言っている埼玉県の治安担当の内務部長の言葉をもう1つ紹介します。「平時に波乱を起こしたのならともかく、あの当時としてあれだけのことに気付いたのはむしろ良いこととさえ思っている」。つまり流言を広げたことは念のために広げたのだから、結果として事実でなかつたとしても、それは良いことなのだと思直つていいのです。

つまり、彼らの発想では、朝鮮人が暴動を起こしているかもしれないから気をつけろという流言を広げるのは、良いことなのだ。その結果、多くの朝鮮人が殺されたが、治安は守られたと言っているのです。何の罪も犯していない人々が数千人も殺された。明らかに治安は崩壊し

たわけです。ところが、彼らは「治安は守られた」と言う。彼らにとつての「治安」という言葉の意味は普通に言う「治安」とは違うということです。つまり、警察の言うことをみんなが聞いてくれた、それが「治安の回復」の意味なのだ。

もう少し焦点を絞れば、当時特に朝鮮人は警察にとつて監視対象だったわけです。独立運動や労働運動をするかもしれない。だから警察は普通の人よりも、もっと真つ先に流言を信じなければいけません。この治安の論理が、警察や内務省として流言を拡散させた。これが治安の論理ということの意味です。

回軍事の論理による組織的殺害

3つ目が軍事の論理です。これは何かというと、直接にはまず軍隊です。軍隊による朝鮮人虐殺の証言を見ると、そのありようというものは「処刑」です。群衆が竹槍で襲いかかったというような勢いに任せられたのではなく、朝鮮人労働者たちを捕まえ後ろ手に縛って一列に並べ機関銃で撃ち殺してしまふとか、こういう言い方はこの場合

使うべきではないかもしれないませんが、手際よく処刑していく。これは何だろうと証言を見ながらずっと疑問だったのですが、これについて示唆を与えてくれたのは、関東大震災の虐殺の研究で第一人者である姜徳相さんという歴史学者です。姜さんが指摘したのは、彼らは植民地で虐殺をやってきた軍隊だということですよ。

1919年の三・一独立運動の後、朝鮮国内では活動できなくなった抗日運動の人たちが満州南部の間島という地方に行くのです。朝鮮の開拓農民が多く住んでいた地域ですが、ここが抗日運動の拠点になる。日本軍はこの抗日運動を壊滅させようと、1920年に軍隊をこの地に送ります。そして、その地域にあった朝鮮人の開拓農民の村を全部焼いていく。そして捕虜は全部殺してしまふ。そういう「戦争」をしたのです。彼らには要するに軍隊同士の戦争ではなく普通の人々を殺したり、一斉射撃で処刑したり、そういう戦争をやってきたわけですよ。

ですから、東京で朝鮮人が暴動

を起こしていると考えた時に、朝鮮人を捕まえてきて捕虜を虐殺するように虐殺する。彼らは大陸でやってきたことをやっただけです。直近ではシベリア出兵や関東出兵ですが、もちろん1910年の韓国併合に至るまでの義兵闘争に対する弾圧も同じだと思います。そういう経験を積んできた日本軍が、東京で同じことをやっただけが軍事の論理ですよ。

か。それも軍隊に関係あります。当時は徴兵制です。先ほど日本軍がシベリアや満州で住民を虐殺するような戦争をしてきたと言いましたが、しかし軍隊とは何かというと、それは徴兵された普通の人々が兵隊としてやっっている集団です。つまり朝鮮や満州やシベリアでその残虐な行為をやってきた人たちが、兵役を終えて街に帰ってくる。普通の八百屋さん、豆腐屋さん、サラリーマンになって暮らしているわけですよ。そこにこの流言がやってくる。朝鮮人を殺さなくてはいいけないといった時に、彼らはあっさり殺してしまうのです。なぜなら殺した経験があるからです。

例えば亀戸事件という有名な事件があります。日本人の社会主義者10人が殺された事件ですが、実はこの時、朝鮮人も60人殺されています。殺したのは習志野の騎兵連隊です。この亀戸署で朝鮮人たちを虐殺した騎兵連隊も、実は間島出兵の時に現地で虐殺をやった部隊です。つまり、植民地支配を完結する中で、外地でやっていた戦争を東京でやっただけです。

軍事の論理には、もう1つの意味があります。実際に人を殺すというのは簡単にできることではないわけですよ。どんなに悪い人でも、人を殺すというのはなかなかハードルが高い。それを、なぜ超えられたの

ている、殺してもいいんだという発想が生まれ、そういう驕りと裏腹に、復讐されるのではないかとという恐怖、これが朝鮮を怪物に、黒い幻影に仕立て上げていく。そして朝鮮人を監視下に置かないといけないという警察が、彼らをスケープゴートにして流言を広げていく。軍隊は、植民地支配を固めていくためにやってきた残虐な殺人を、東京の真ん中でやる。これらは全て植民地支配というものが生んだ暴力であると言えると思います。

回100年後のいま

しかし、なぜそのことが今、私の中で石原都知事の三國人発言につながっていたのか。この差別的論理、治安の論理、軍事の論理、軍事の論理は少し違うにしても、差別的論理と治安の論理について言えば、これは今でも生きていっているものではないかと思えます。

例えば東日本大震災の時には、石巻で「中国人が窃盗団、強盗団をつくって横行している」という流言が広がりました。これがある講演で話したところ、終わった後に若

い人がやってきて、「いや、びつくりしました。実は、僕はある時、石巻でボランティアをしていました。で、夜のボランティアの総括会議で、強盗団が徘徊してるから、夜の一人歩きは気を付けてください。みんなで言合っていたんです。まさかあれがデマだとは今日まで考えたこともありませんでした」と言うのです。今でも、災害が起きた時に差別流言は発生するのです。

阪神淡路大震災の時にもありました。報道されたところでは、いったん火災が鎮火した家から火が出た。誰かの放火に違いないという流言が広がったそうです。いったん火を消し止めた家からまた火が出るのは再燃火災という自然現象です。この時にいったん火が消えたのにまた火が出るのはおかしい、放火に違いない、誰かが放火したのか、「東南アジア系の外国人だ」と、そういう流言が広がったそうです。こういう災害時の差別流言は今でも生まれるのです。つまり、差別的論理がここで働いてるわけですよ。

そして、治安の論理です。石原都知事は、地震が起きたら外国人

が必ず暴動を起こすと言った。記者からの批判に対して、「起きるかどうかわからなくても、起きることに備えて自衛隊を送るぞ」と言うことが抑止力になるんだ。つまり、あなたたちが外国人を犯罪者として見ることが、犯罪に対する抑止力になると彼は言ったのです。完全に100年前の震災当時の後藤新平と同じ治安の論理が生きているわけですよ。だとすると、これは全然昔の話ではなく、現代につながっている話なわけですよ。そう考えて、いかに書いたりしてきたわけですよ。

ところが、それを否定する人々がいるのです。ものすごく荒唐無稽なのですが、朝鮮人が井戸に毒を入れたとか暴動を起こしたというのは事実なんだという人々があります。具体的にいうと工藤美代子というノンフィクション作家が『関東大震災「朝鮮人虐殺」の真実』という本を2008年に書きました。これは、当時その虐殺の原因となった流言は事実だと主張する本です。何を根拠に事実だと言えるのかというと、当時の新聞がそのように

伝えているからだと言っているのです。

当時の新聞が流言をそのまま書き散らしていたのは事実です。9月2日から3日に出た号外にこのような記述があります。「不逞鮮人各所に放火し、帝都に戒厳令を敷く。鮮人至る所めつた切りを働く。200名抜刀し集合、警官隊と衝突する。」そういった記事が確かにある。「200名抜刀し集合」というのは、朝鮮人の軍団が200名集まって日本刀を持って目黒の競馬場で結集して進撃するという荒唐無稽な話ですが、これが全部事実だと工藤美代子は言っています。この本が出た後に、真似をしてネット上の人たちが広げた記事が「不逞鮮人1000名と横浜で戦闘開始、歩兵1個小隊全滅か」、「発電所を襲う鮮人団」です。朝鮮人1000名が横浜で軍隊とぶつかったと書いてあります。「これは事実だ」「これ

目黒と工場の火薬爆発

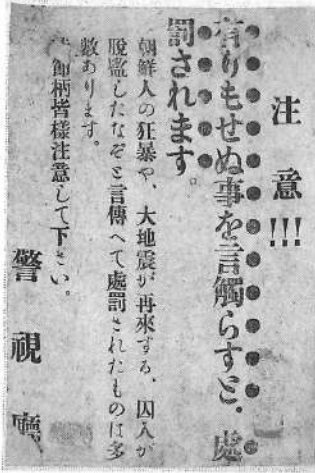
震源地は太平洋にも

【早川京朝 記者 早川京朝 記者 早川京朝 記者】
 震災発生後、目黒区目黒の目黒工場に火災が発生し、火災の原因は不明である。この火災は、朝鮮人の暴動によるものか、あるいは偶然の事故によるものか、当時の新聞は、朝鮮人の暴動によるものか、あるいは偶然の事故によるものか、というように伝えている。これは、当時の新聞が、朝鮮人の暴動によるものか、あるいは偶然の事故によるものか、というように伝えている。これは、当時の新聞が、朝鮮人の暴動によるものか、あるいは偶然の事故によるものか、というように伝えている。

が真相だ」といつて二期ネット上に広がりました。

実際には、こういった流言記事は震災から1週間ほどで姿を消します。そして報道規制が解除された10月、朝鮮人が暴動を起こしているとか、井戸に毒を入れたとか、そのときはもう誰も信じませんでした。なぜかという、井戸に毒が入って、井戸水を飲んで私の父は死にましたとか、あるいは、銃を持って日本軍と戦闘している朝鮮人部隊を見ましたという人は1人もいなかった。見たのは、朝鮮人を殺す人々、朝鮮人が殺されていくさまだけだったからです。

これは9月6〜7日に警視庁がまいたビラです。ようやく流言を否定しました。その後の10月の報道ではこうなります。「横浜で殺され



た朝鮮人140〜150名。「護送中の朝鮮人を奪って虐殺、千葉自警団」。「朝鮮人の襲来を巡查が触れ回った」。これが実際に起きたことだったわけです。ところが工藤美代子やネット右翼などの否定論者は、10月には当時の新聞も虐殺を報じていたことを全く無視して、最初の9月1日から1週間の流言記事だけを広げて、それを事実だと称してネット上にばらまきました。

それを日本の右翼政治家たちが広げるといふことが起きてきました。そういう中に、実は小池百合子都知事の追悼文取り止めも起きています。小池都知事に追悼文取りやめを働きかけたのは古賀俊昭という右翼の都議ですが、工藤美代子の本を「これが真相だ」「これを読め」と言つて小池都知事に迫ったのです。そして、恐らく小池都知事自身も半ばそれを信じている。こういった歴史修正主義、歴史歪曲といったものを信じて政治家たちが騒ぎ、行政が朝鮮人虐殺を否定するといふような形になってくる。

例えば2022年には、人権芸術展で朝鮮人虐殺をテーマにした

映像作品を上映しようとした飯山由貴というアーティストの作品が、東京都によって上映禁止にされたことがありました。東京都の職員が「小池都知事が認めていないのに、朝鮮人虐殺が事実だったかのよう」に描いているこの作品は上映できない」と言いました。こういう虐殺否定論というのが広がっているのが今の状況です。

100年目である今年は、横網町公園の朝鮮人犠牲者追悼碑の前で、「虐殺はなかった」と言っている右翼団体が集会を開こうとしました。それはホロコースト記念碑の前でネオナチが集会を開くのを認めるようなものですから、東京都は認めるなど言つて、私も含めて多くの人々が声明を出し、声を上げたのです。そして当日、追悼碑の前には数百人の市民が座り込みをし、レイシストの接近を阻止しました。こういうせめぎ合いが、今の100年目の風景ではないかと思つていきます。

東京の良さというのは、いろんな人々がいて、いろんなアイデンティティーでいろんな民族の人々がいる

ことが肯定されていること。それを喜ばしいと言える、そういう東京にしたいという思いがあります。日本と言うとすごく大きくなるので、東京と言いたい気分が自分の中にはあります。そういう東京をつくっていく。誰かがマジョリテイー属性じゃないからという理由で排除され、いないことにされてしまう。そういう東京ではなくて、違いがある人々がいて、一緒に私たちの社会をつくっている、そういう東京でありたい。

それと逆に、違うものは存在を認めない、生きていることを認めないという極致に至ったのが100年前の関東大震災時の朝鮮人虐殺だったわけです。決して繰り返してはいけない、そしてそれと反対の方向にもっと進んでいかなければいけない。それを示している負の原点がこの事件ではないか。負の原点の話をしなくてはいけないし、そのことを示すために、東京都の都知事は追悼文を送るべきだと私は思っています。そのことをきつちり解決しておかなければいけないと考えている次第です。